30amE-147

わが国の子宮体がんの死亡率と罹患率における年齢・時代・コホート効果

○小林　瑞希[1], 内田　博之[1], 大竹　一男[1], 内田　昌希[1], 夏目　秀視[1], 小田切　陽一[2], 小林　順[1]（[1]城西大薬, [2]山梨県大看）

【目的】子宮体がんにおける予防や医療が、子宮体がんの死亡や罹患に寄与しているかどうかを観察するための一助として、子宮体がんの死亡率と罹患率を年齢、時代およびコホート効果に分けて比較する。【方法】人口動態統計と地域がん登録全国推計値より、1975 年から 2005 年までの子宮体がん罹患数および死亡数を得た。ベイズ型 APC 分析を適用し、子宮体がんの死亡率と罹患率に与えた年齢、時代およびコホート効果を推定した。【結果・考察】罹患率と死亡率ともに、時代効果とコホート効果に比べ年齢効果は大きかった。罹患率の年齢効果は 20～24 歳以降増大トレンドを示したが、55～59 歳以降には低減トレンドに転じた。時代効果は 1975 年以降増大トレンドを示した。コホート効果は、1888 年生まれ以降穏やかな低減トレンドを示したが、1942 年生まれ以降には穏やかな増大トレンドに転じた。死亡率の年齢効果は 20～24 歳以降増大トレンドを示し、55～59 歳以降横ばいトレンドを示した。時代効果は 1975 年以降増大トレンドを示した。コホート効果は、1930 年生まれを変化点として僅かに増大から低減トレンドに転じ、1942 年生まれを変化点として僅かに低減から増大トレンドに転じていた。罹患率と死亡率の比較では、55～59 歳以降の年齢効果は、罹患率では横ばいトレンドであるが、死亡率では低減トレンドを観察した。1975 年以降の時代効果は、罹患率と死亡率ともに増大トレンドを観察した。コホート効果は、若い世代のコホートでは罹患率が低減トレンド、死亡率が増大トレンドであった。以上より、このような罹患率と死亡率のトレンドの相違がどのような要因により影響を受けたのか解明が必要である。